

金属製品は陶器で代用

戦時中に発令された「金属類回収令」により、銃後の人たちは家などにある金属製品を国に差し出し、木や陶器の代用品を使っていました。食器やおろしがね、湯たんぽ、キセルなどが陶器で代用されていました。



寄せ書きの日章旗

出征する兵士を祝福・激励・鼓舞するため、親類や地域の人が布製の旗に寄せ書きをして持たせました。多くの人から激励されることで、「行きたくない」と思っているにもかかわらず行かざるを得ない状況に追い込まれていたことなのでしょう。当時は自由に意見が言える時代ではありませんでした。

銃後のモノと暮らし

海老名市教育委員会蔵の戦時中の資料を、海老名市温故館職員の解説で紹介しします。銃後の「モノ」からは当時の暮らしを垣間見ることができます。

慰問袋

銃後から戦地の兵士への陣中見舞いに使った袋です。ようかんやゆで小豆の缶詰などの食料、たばこ・筆記用具など戦地で手に入らない物を送りました。特にふるさとの情報が分かる新聞などが人気で、皆で回し読みをしていたようです。



奉公袋

兵士が私物を入れる袋です。軍隊手帳や記章などの貴重品のほか、家族の写真や筆記用具などを入れました。赤紙(※)が来たらいつでも持ち出せるよう、居間の柱などに掛けていたそうです。多くの成人男性は、常に緊張感を持った生活をしていただことでしょう。

※赤紙・・・召集令状

報国債券

国は多額の軍事費を賄うため大量の債券を発行し、強制的に国民から資金を供出させました。敗戦後の国家財政は厳しく、それらの債券の元金や割増金の支払いが困難となり、多くの国民の生活を苦しめました。



8月は海老名市平和月間

戦争を知り、平和の大切さを考えよう

閩福祉政策課 ☎(235)4820 市民相談課 ☎(235)4568 教育総務課 ☎(235)4925

8月15日、日本は76回目の終戦の日を迎えます。アジア・太平洋戦争では、多くの人の尊い命が失われ、国民の生活にも大きな影を落としました。

戦時中は、「戦地」に対して、直接戦闘に関わらない地域や国民を「銃後」と呼んでいました。戦争が始まり兵器などに利用するための大量の金属類が必要になると、国は「金属類回収令」を発令しました。このため、日常的に使っていた金属製の生活道具は陶器製などに代わり、銃後の生活に影響を与えました。食料難を含めて、とにかく物がなく、節約と我慢が続いた時代でした。

今号は、戦時中の様子が分かる資料や市民の戦争体験講話を紹介しします。親や兄弟を戦地に見送った人たちの思いや、暮らしを想像し、戦争がもたらす影響や平和の大切さを考えましよう。

戦争を語り継ぐパネル展

広島や長崎の原爆に関するパネルや戦時品の展示のほか、市民の戦争体験講話を紹介しします。

期 8月2日(月)～13日(金) (閉庁日除く。最終日は12時まで) 場 市役所エントランスホール



父からはがきには検閲で塗りつぶされた箇所も

「母も忘れていたのでは？」と清田さん。母の他界後に見つけた父の茶碗



戦争体験講話
動画ページ

かっと思ひます。母が亡くなってからだいぶたつた頃、偶然にも父のご飯茶碗と杯を見つけてました。父が必ず帰ってくると信じて持っていたものの、時がたち母も忘れてしまっていたのでしよう。私に一度も話したことがなかったのでびっくりすると同時に、母の気持ちを思い涙してしまいました。

戦争による私たちのような遺児や遺族を出さないためにも、平和な日々が続くことを願わずにはいられません。

平穏な生活を営んでいた昭和18年5月、父は臨時召集令により東京の部隊に入隊しました。約1カ月たったところに届いた父からはがきで、満州東北地方のソ連国境近くの部隊にいる事が分かりました。はがきには必ず検閲の印が押され、軍隊生活など国に都合が良くないことは墨で塗りつぶされていました。

昭和19年6月にはフィリピンのミンダオ島に転戦し、同年の8月ごろに届いた私宛てのはがきが最後でした。文面には「いたずらをして母さんの仕事の邪魔をしないで元気に遊びなさい。幼稚園に入ったら必ず知らせるように」とあり、父は楽しみにしていたようですが、私が幼稚園に入園したのも知らず、あと少しで終戦の昭和20年6月25日に戦死し帰らぬ人となりました。

母は戦後の苦労やつらさ、悲しみは胸の奥にしまって、私には苦労を語ることは少なかったと思います。

戦争体験講話～戦死した父と私の戦中戦後～ (市の動画から編集)

父からの最後のはがきと母の思い



海老名市遺族会
清田節子さん